

この変てこな問答のことなのである。

それはよく晴れた星の多い晩であったが、打出しになって、あと片づけもすんだころ、小人は話相手もないものだから、テントのそとに出て、一人ぼっちで涼んでいた。北川氏はこの好機をのがさず、彼に近寄り、暗い野天で無駄話をはじめたものである。つまらぬ世間話から、深山木氏が殺された問題の日の出来事に移って行った。北川氏はその日、鶯谷で曲馬団の客になって、見物していたと偽り、出鱈目にそのときの感想などを話したあとで、こんなふうに必要な点にはいって行った。

「あの日、足芸があつて、友之助ね、ホラ池袋で殺された子供ね、あの子が壺の中へはいつて、グルグル廻されるのを見たよ。あの子はほんとうに気の毒なことだったね」

「ウン、友之助かい、可哀そうなはあの子でございよ。とうとうやられちゃった。ブルブルブルブルブルブル。だがね、兄貴、その日に友之助の足芸があつたてえな、おまはんの思いちがいだっせ、おれはこう見えても、物覚えがいいんだからな。あの日はね、友之助は小屋にいなかったのさ」

小人はどこの訛りともわからない言葉で、しかしなかなか雄弁にしゃべった。

「千円賭けてもいい。おれは確かに見た」

「だめだめ、兄貴そりゃ日が違うんだぜ。七月五日は、特別のわけがあつて、おらあちゃんと覚えてるんだ」

「日が違うもんか。七月の第一日曜じゃないか。お前こそ日が違うんだろ」
「だめだめ」